

中国の大学生の親扶養意識に関する研究：家族満足度・きょうだい数・性別との関連

韓, 海錦
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/18431>

出版情報：九州大学心理学研究. 10, pp.185-189, 2009-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



中国の大学生の親扶養意識に関する研究

— 家族満足度・きょうだい数・性別との関連 —

韓 海錦 九州大学大学院人間環境学府

Research on parents supporting consideration of the university student in china
In relation to rating of family satisfaction, number of brothers and sisters and sex

Han Haijin (*Graduate school of human environment studies, Kyushu university*)

A standard measuring parents supporting consideration for university student in china was created and its relations to number of brothers and sisters, and sex examined. It is concluded that factors of 'supporting responsibility' and 'supporting consciousness' were found in the parents supporting consideration standard. It was suggested that rating of family satisfaction and sex are related to parents supporting consideration.

Key Words: Chinese university student, Parents supporting consideration, Family satisfaction rating,
Number of brothers and sisters, Sex

I. 問題と目的

1. はじめに

高齢化は21世紀の中国における重大な社会問題である。2000年11月に行われた第5回全国国勢調査によると、65歳以上の人口は8,811万人で、総人口に占める割合が7%になり、中国はすでに高齢化社会に入っている。馬(1993)によれば、開発途上国でありながら高齢化社会を迎えている中国において、社会保障制度、福祉施設などが不備のため、今後も家族が主な扶養者であり、家族の役割は欠かせないと指摘されている。

家族と言えば、配偶者や子どもなどを思い浮かべるのは言うまでもない。儒教道徳に基づく「親孝行イデオロギー」が内面化されてきた中国において、親は子からの孝行の対象であり、老人は豊かな経験をもった尊敬されるべき存在である。倫理上だけでなく、法律上でも子どもが親の面倒を見ることは定められ、子どもが親の老後扶養を担うのは当然のことだと考えられてきた。アメリカの研究では、子の老親に対する扶養義務感は filial responsibility もしくは filial obligation として取り上げられている。また Schorr (1960) は、その扶養義務を「親の基本的なニーズに応える子の義務である」と定義している。上記の定義に基づいて、本稿では親扶養意識を「老親の基本的なニーズを満たすために援助しなければならない、また援助したいという内面的な精神状態」と定義する。

しかし近年少子化、核家族化が急速に進むにつれて、親は過保護・過干渉といった養育態度を取りがちであり、子どももきょうだいなどと交流する機会が減少している。

このような環境によって、子どもは自己中心的で、他人への思いやりに欠けた青年になり、家族の相互人間関係も希薄化しつつあると指摘されている(張, 2003)。

以上のことから筆者は、社会的な問題になり得る青年と家族の関心に焦点を当てて、現代青年の親扶養意識、また扶養意識に影響を与えられる家族満足度を取りあげ、その関連について検討したい。

2. 青年期と家族

青年期は、自分がどう生きたいのか自分なりの道を見つけていく、自己を確立していく、精神的に独立・自立していくといった発達的な課題を抱えるとされる時期である(吉, 2001)。またこの時期は、青年が成人社会の一成員として権利を行使し、義務を果たすことのできる人格成熟に達する準備期間として位置づけられており、自己責任を確立することが要請されている。岡堂ら(1986)は、「人間関係上の義務は、日常的であり、すべてが破壊的とは言えない。義務を認識し、喜んでそれを果たすことは、満足を感じさせる健全な関係にとって、最も大切な要素である。」と指摘している。

家族は社会の最小単位であり、家族関係は人間関係の基礎とも言える。青年期の人間関係のうち、対人関係の再学習という意味での問題がもっとも典型的に現れるのは、家族、中でも親との関係である。青年は親への信頼と依存をベースにししながら、親を離れて自分の道を見つけて、自分の足で歩き出さなければならない。この依存から自立に向かうことは、自立して親に心配をかけないといった親孝行意識の形成に繋がっていると思われる。

3. 中国における親扶養について

親に対する扶養意識を正確に捉えることは、親子関係の実態や現在の家族関係を知るための重要な資料になると期待できる。だが、中国ではその状況を客観的に計測し、それがどのような要因と関連しているかを検討した研究はほとんど見当たらない。

儒教道徳に基づく「親孝行イデオロギー」が内面化されてきた中国において、倫理上のみならず法律上も子どもが親の面倒を見ることは定められており、子どもが親の老後扶養を担うのは当然のことだと思われてきた。だが、近年高齢化、少子化、きょうだい数の減少により、子どもは多様な人間関係を味わう機会を失い、きょうだいの世話をしたりきょうだいをモデルにすることによって行動規範を身につけたりする経験も得られなくなると思われる。そこで現代の青年は自己中心的で思いやりが欠け、親扶養に対する意識がだんだん薄れていく恐れがあると思われる。とりわけ一人っ子の場合は、「一人っ子政策」により、将来4:2:1(4人の親を抱え、一人っ子夫婦がさらに子どもを一人持つ)の家族形態になる可能性が高いため、負担感と同時に親扶養意識を強く感じることが予測される。また「養児防老」(老後の世話を受けるために、男の子を生み育てること)という伝統的な観念が少なからず残っているため、性差の検討も必要だと思われる。

4. 家族満足度と親扶養意識

家族への満足度は、人それぞれで様ではない。また、何によって満足するかもさまざまである。しかし、人間が家族の一員として存在し、その機能を果たしている上で、主観的ともいえる満足度は重要な意味を持つ。満足度やその度合いといったものは状況によって変化するものである。だが、個人の家族に対する感情やその現れとしての行動、あるいは家族生活全体の価値観となっていくことも考えられる。そうした感情は日常の何気ない言動、家族相互の関係に大きく影響している。

このため、家族への満足度が家族構成員としての青年期にある子どもの意識形成、具体的な生活行動やその状況の認知とどのような関連があるかを検討するのは興味深い問題である。細江・鄭(1988)の日本と台湾の大学生の老親扶養意識についての研究では、親の老後扶養意識を規定する要因の一つに「家族への満足」を挙げている。この研究によると、日本において家族関係への満足度と介護意識の間に有意な関連が認められ、家族関係に「非常に満足」と答えている者の73.8%は「何をあいても世話をすると答えており、不満とする者の39.1%は「どうするか分からない」、15.2%は「お金を払って人に頼む、施設に入れる」と答えている。すなわち、家族への満足度が親扶養意識を規定する重要な要因となっ

ていることが明らかである。

5. 親扶養意識に関する先行研究

中国での親扶養意識に関する調査と言えば、包・浅(2001)、張(2003)劉・長弘ら(2005)の研究が挙げられるが、いずれも地域別(沿海地域、南西部)に行われた社会調査である。包・浅(2001)は、中国沿海地域の大学生を性別と戸籍別で研究し、男性が女性よりも老親扶養に積極的で、出身地が農村のほうが都市部に比べて扶養意識が強いということが明らかになった。また、劉・長弘ら(2005)は、中国南西部における大学生を性別と民族別で検討した結果、男性が女性より将来における老親との同居志向が強く、少数民族が漢民族より同居意識、介護意識が高いということが分かった。だが、このような先行研究は、いずれも地域別に行われた社会調査に留まり、それがどのような要因と関連しているかを検討した研究はほとんどみられない。

このため、本研究では社会調査に留まらず、一步踏み込んで親扶養意識に影響する要因を取り上げたい。具体的には、親扶養意識に影響する要素には社会レベル(社会経済的要因、文化的要因など)から個人レベル(性別、家族構成、本人の続柄など)までであるが、筆者は心理学的側面から検討し、親扶養意識に関連があるであろう多くの要因の中から、家族が個人に与える満足度について取り上げることにする。つまり、青年期にある大学生の家族へ満足度と親扶養意識との関連を明らかにしたい。

6. 目的

以上のことより本研究の目的は次のとおりである。

第一研究：老親扶養に関する義務感を経済的扶養意識、情緒的扶養意識、介護意識、同居意識の面から測る「親扶養意識尺度」の作成を行なう。

第二研究：家族満足度と諸属性(きょうだい数、性別)が親扶養意識とどのような関連があるかを明らかにする。

II. 第一研究

1. 目的

老親扶養に関する義務感を経済的扶養意識、情緒的扶養意識、介護意識、同居意識の面から測る「親扶養意識尺度」の作成を行なう。

2. 方法

(1) 親扶養意識尺度の作成：甲斐・太田(2002)の「老親扶養義務感測定尺度」計11項目に従来の関連研究を参考にして9項目を加え、計20項目の案を作成した。そして、臨床心理学専攻大学院生により項目の妥当性について検討した。

(2) 日本語版から中国語版への翻訳：日本語が堪能な心理臨床分野の大学院の留学生に依頼して、質問紙を日本語版から中国語版に翻訳した。

(3) 2007年10月に中国にある某大学一年生128名に中国語版を実施

(4) 記入漏れのない126名のデータをSPSS 11.0Jにより重みなし最小二乗法を用いて因子分析

3. 結果

一回目の因子分析結果について固有値(1.0以上)、スクリープロットの傾き、解釈可能性を基準として、妥当な因子数を検討した。その結果、2因子が最も解釈可能な因子数であると想定した。

次に因子数を2因子に指定した上で、プロマックス回転を利用して因子分析を再度行った。そして各項目のうち、共通性が.16以下の項目及び2つ以上の因子について、因子負荷量が.35以上となる項目を削除し、再度因子分析を行った。この2因子による累積寄与率は44.8%であった。その結果はTable 1のとおりである。

因子の命名：第1因子は9項目からなり、「~を〇〇べきだ」「~を〇〇しなければならない」など主に社会的な行動規範の内容のため、「扶養責任性」($\alpha=.77$)と命

名することにした。また第2因子は6項目からなり、「~を〇〇つもりである」、「~を〇〇たいと思う」など子どもからの積極的な行動を表す内容が多いため、この因子は「扶養自覚性」($\alpha=.73$)と命名することにした。

4. 考察

本研究では上記日本語版の尺度及び文化・慣習の面を考慮し、従来の関連研究から収集した項目などを参考にした上で、中国語版の親扶養意識尺度の作成を試みた。また高齢化、少子化が急速に進んでいる中国の現状を考慮して、調査回答者を親と密接な関わりがある大学生に特定した。

老親の扶養に関して、日本では太田・甲斐(2002)の研究が挙げられるが、彼らは家族が提供できる援助として「経済安定のための援助」、「情緒的満足のための援助」、「保健のための身体的補助」の3つの形態を含めた親扶養義務感測定尺度を開発している。本研究においても経済的、情緒的、身体的のサポートは異なる因子として抽出されると仮説した。しかし、今回の分析結果では経済的、情緒的、身体的などの分類とはならず、第1因子は「扶養責任性」、第2因子は「扶養自覚性」であり、それぞれの因子のなかに上記側面の内容が取り込まれている。

Table 1
親扶養意識尺度因子分析の結果

質 問 項 目	因子負荷量	
	Fac1	Fac2
Fac1 扶 養 責 任 性 ($\alpha=.77$)		
7. 親の介護をするのは子として当然のことだ。	0.788	0.108
3. 子どもは老親に生活費など経済的援助をする必要はない	0.663	0.036
10. 子どもは老親と一緒に何かを楽しむような時間をもつべきだ	0.620	-0.123
6. 子どもは親の介護を覚悟しなければならない	0.590	0.296
2. 老親の経済的援助をするのは、子として当然のことだ	0.547	-0.204
5. 老親介護は必ずしも子の役割ではない	0.484	0.179
12. 今までの恩を返すつもりである	0.450	-0.161
1. 子どもは老親が日常生活に困らないよう、金銭的に援助をするべき	0.443	-0.050
16. 親の期待に添えるようになりたい	0.404	0.288
Fac2 扶 養 自 覚 性 ($\alpha=.73$)	Fac1	Fac2
18. 将来、親と一緒に暮らすつもりである	-0.205	0.759
19. 親が年老いたら一緒に暮らしたいと思う	-0.202	0.732
8. 老親が介護を子どもに望むのは当然のことだ	0.113	0.602
14. 親の老後のことを考える	0.207	0.464
20. 結婚するまで、親と一緒に暮らすつもりである	-0.360	0.451
15. 自分の将来と親の将来を考える	0.183	0.415

累積寄与率：44.8%

因子抽出法：重みなし最小二乗法

回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス

そして、因子分析結果から見ると、具体的な経済的、情緒的、身体的サポートより、内外の立場つまり社会側からの規範なのか、それとも自発的な行動なのかによって分類されている。

このような相違を生じさせたのは、中日の社会的・文化的背景に原因があるのではないと思われる。例えば中国では、子どもが親の面倒をみることは法律上定められた規範であり、倫理上でもその実行が要求されている。これらの社会的な規範は外側から子どもに扶養責任を持つように強調している。また、第2次大戦後日本では親孝行を学校で教えるということはなくなったが、中国では今でも「思想道德」の授業を通して儒教道徳に基づく「孝」が教え込まれている。家庭だけでなく、学校教育を受けた子どもは、次第に親扶養を当然のことと考え、親扶養を自覚することになっていたと思われる。

Ⅲ. 第二研究

1. 目的

家族満足度と諸属性（きょうだい数、性別）が、親扶養意識とどのような関連があるかを明らかにする。

2. 方法

(1) 調査対象

中国にある某大学一年生 126 名

属性：一人っ子 72 名、非一人っ子 54 名 / 男子 61 名、女子 65 名

(2) 調査時期

第一研究と同じ

(3) 調査手続き

フェースシート：性別・きょうだい数・学年・学部
親扶養意識尺度：第一研究で作成した尺度
家族満足度尺度：黒川（1988）が作成した日本語版（計 14 項目）を、心理臨床分野の大学院留学生に依頼し、中国語版に翻訳したもの

(4) 分析方法

家族満足度及びきょうだい数（一人っ子群、非一人っ子群）を独立変数、親扶養意識を従属変数にして、2 要因の分散分析を行う。

家族満足度及び性別を独立変数、親扶養意識を従属変数にして、2 要因の分散分析を行う。

3. 結果

(1) 家族満足度・きょうだい数と親扶養意識の関連

分散分析の結果、家族満足度の主効果が有意であった ($F_{(1,112)} = 14.73, p < .05$)。一方、きょうだい数（一人っ子群、非一人っ子群）と親扶養意識の間では有意な差が見られなかった。また、家族満足度ときょうだい数との間

にも有意な差がなかった。Fig.1 参照。

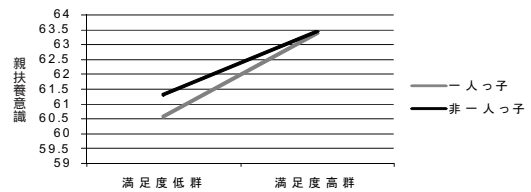


Fig.1 きょうだい数・家族満足度による家族扶養意識得点

(2) 家族満足度・性別と親扶養意識の関連

分散分析の結果、家族満足度の主効果が有意であった ($F_{(1,112)} = 17.48, p < .05$)。また、性別と親扶養意識の間に有意な差が見られた ($F_{(1,112)} = 5.55, p < .05$)。一方、家族満足度と性別との間には有意差が見られなかった。Fig.2 参照。

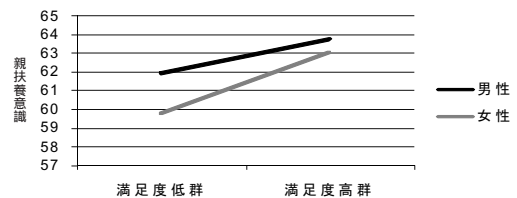


Fig.2 性別・家族満足度による家族扶養意識得点

4. 考察

今回の研究結果では、諸属性（きょうだい数、性別）に関わらず、家族満足度と親扶養意識の間に密接な繋がりがあることが見られた。つまり、子どもの家族満足度が高くなればなるほど、親扶養意識が強いと考えられる。この結果は、先行研究の結果と一致している。

家族満足度と親扶養意識の関連性を考慮する際、高齢化、少子化が急速に進んでいる中国の現状を背景に、きょうだい数（一人っ子群、非一人っ子群）別に検討した。Fuligni (2002) は、一人っ子の青年が両親を助けるための唯一の子どもであるため、きょうだいがいる子どもに比べて、より高いレベルの家族義務意識を持っていると示唆している。つまり、一人っ子はきょうだいがいないため、将来親の扶養などの重荷を一人で背負わなくてはならないというプレッシャーをより強く感じるだろう。以上のことに基づいて、調査の段階では一人っ子が非一人っ子より親扶養意識が高くなると仮説していたが、本研究ではそれとは異なる結果が見出された。分散分析の結果から、一人っ子と非一人っ子において有意差が見られなかった。このような結果を生じさせたのは、文化的背景があるからではないかと思われる。すなわち中国

文化の中にはたくさんの伝統があり、例えば儒教、家族連帯意識の強調・尊敬、そして義務感と責任感があるためであろう。また家族の躰を元に、学校での親孝行教育によってきょうだいの有無に関わらず、青年の親扶養意識は全体的に高くなったと思われる。家族における満足度は、様々な環境にある家族に共通する感情であり、家族の適応性と凝集性を図る有効なものである。そして満足度やその度合いといったものは状況によって変化するものであるが、個人の家族に対する感情やその現れとしての行動、あるいは家族生活全体の価値観となっていくことも考えられる。そうした感情は日常の何気ない言動にも影響し、家族相互の関係に大きく影響している。細江・鄭（1988）の研究では、その関連性が明確にされている。すなわち、親扶養意識を規定する重要な要因は親孝行意識であるが、その親孝行意識を規定する要因としては家族関係への満足度と親孝行教育ということである。

きょうだい数だけでなく、性別による家族満足度と親扶養意識の関連も検討した。その結果、男子学生は女子学生より高い親扶養意識を持つことが分かった。このような結果は包・浅（2001）、劉・長弘ら（2005）の研究と同様な傾向を示している。男性が女性より親扶養意識が高いと言えるであろう。それは社会的に男女平等の意識が高まり、女性の就労も増加したものの、数千年続いてきた「養児防老」（老後の世話を受けるために、男の子を生み育てること）という伝統的な考え方の影響によって、また婚姻形態から考えて男性のほうがより高いプレッシャーを感じるのではないかとと思われる。

IV. 今後の課題と展望

以上の結果・考察を踏まえて、最後に今後取り組むべき課題及び展望について述べる。

本研究では親扶養意識を測るために、中国語版の親扶養意識尺度の作成を試みたが、質問項目数が限られているため因子分析での検討が不十分であった。項目数を増やして再検討が必要であろう。

一人っ子の特異性について先行研究とは異なる点が見られた。これは文化的背景の影響があるかも知れない。また一人っ子の特異性が、その一人っ子の背景にある家族システムの全体と関連していると考えられるが、それについて今回の研究では把握することができなかった。したがって、今後の研究では家族システム全体と関連した検討が望まれる。

今回は大学生の親扶養意識についての研究であるが、その背景にある家族、親には触れなかったため、今後は親も調査対象に含め、青年と親という1つの家族システ

ムを対象にした研究を行うこともできると思われる。

中日とも高齢化、少子化が進んでいるため、両国における青年の親扶養意識について比較研究を行うことも興味深いところではないかと思われる。

謝 辞

本論文をまとめるにあたり、貴重なご意見をいただきました九州大学大学院人間環境学府の野島一彦教授、福岡留美准教授に感謝致します。

引用文献

- 浅 野仁・包 敏（2001）. 中国沿海地域の大学生の老親扶養意 関西学院大学社会学部紀要, 89, 185-193.
- アメリカ夫婦家族療法学会（編）日本家族心理学会（訳編）岡本哲雄（訳・編著）1986 家族療法事典 星和書店
- 岡林桂生・大山俊男（1986）. 青年期における家族意識 大東文化大学紀要, 社会科学, 24, 1-34.
- Fuligni.A.J（2002）. Family obligation and the transition to young adulthood. *Development Psychology*, 38, 856-868.
- 細江容子・鄭 淑子（1988）. 日台大学生の老親扶養意識 東京と台北の調査結果から 社会老年学, 28, 71-81.
- 吉 沅洪（2001）. 日中文化から見た学校適応と自我同一性に関する研究 学生相談研究, 22, 1-9.
- 甲斐一郎・太田美緒（2002）. 老親扶養義務感尺度の開発 社会福祉学, 42(2), 130-138.
- 黒川 潤（1988）. 家族関係における満足度とコミュニケーションについての基礎的研究 Circumplex Model に基づくスケールを用いて - 文教大学人間科学部卒業論文
- 劉 頊玲・長弘千恵・黄 賛松（2005）. 中国南西部地域における大学生の老親扶養意識に関する調査 久留米医学会雑誌, 68, 152-158.
- 馬 利中（1993）. 中国高齢者の養老扶助 保健の科学, 35(11), 814-818.
- Schorr AL. (1960). Filial responsibility in the Modern American Family. United States Department of Health Education, and Welfare, Social Security Administration, Division of Program Research Washington, D.C.
- 張 磊（2003）. 青年の家族義務意識に関する研究 自我同一性、充実感との関連 九州大学教育学部卒業論文